

私立大学研究ブランディング事業

平成30年度の進捗状況

学校法人番号	131059	学校法人名	東京工芸大学		
大学名	東京工芸大学				
事業名	「色」で明日を創る・未来を学ぶ・世界を繋ぐ KOUGEI カラーサイエンス&アート				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	3940人
参画組織	工学部、芸術学部、大学院工学研究科、大学院芸術学研究科				
事業概要	テクノロジーとアートの融合を目指した小西写真専門学校をルーツとし、現在では工学部と芸術学部を擁する本学ならではのブランド(独自色)を大きく打ち出す全学的研究テーマとして、「色」を取り上げ、国内の大学では唯一の「色の国際科学芸術研究拠点」を形成する。色はテクノロジーからアートまでを包含する学際的研究分野であり、これを推進することは、「真の工・芸融合」を目指す学長の大学運営の方向性と合致している。				
①事業目的	<p>本学の原点は、1923年(大正12年)に創設された「小西写真専門学校」である。当時の最先端表現技術であった写真に関する技術者・研究者を養成するために創設され、写真技術(テクノロジー)と写真表現(アート)との融合を目指した先駆的な学校であった。現在では工学部と芸術学部の2学部を擁する、極めてユニークな学部構成の総合大学へと発展し、工・芸融合を大学の特色として標榜している。本学のロゴデザインの水色の円は工学部、黄色の円は芸術学部、それらが交わる緑の部分には工学部と芸術学部の融合を表している。しかしながら、創設当時と比べると、研究・教育の両面において工学部と芸術学部の融合・連携は必ずしも活発ではなく、本学が持つ独自性、潜在能力を十分活かさきれていないということが、本学の大きな課題のひとつである。</p> <p>そこで、本学のルーツである写真、印刷、光学といった学問分野に根差し、今日の工学部と芸術学部の両学部へ共通する全学的な研究テーマとして、「色」を取り上げ、国内の大学では唯一となる「色の国際科学芸術研究拠点」を形成し、ロチェスター工科大学(米)、中国文化大学(台湾)、タイ王立チュラロンコン大学、東フィンランド大学等、工・芸にわたる色の研究機関を有する海外の大学との連携もはかりながら、「色といえば東京工芸大学」と言われるようなブランドを築くとともに、学長方針である「真の工・芸融合」を目指す。</p> <p>外部環境、社会情勢に目を向けると、大手電機メーカーをはじめとする輸出産業の不振に伴う経済成長の低迷、超高齢化社会、日本の将来を支える教育の3つが、今、我が国が抱える最も大きな課題であるといえよう。各国の嗜好に合わせた製品の色・デザイン、色が重要な要素となるメディア輸出産業(いわゆるクールジャパン)、医療・介護および教育への色の応用等、色の研究は、我が国が抱える問題に対して大きな貢献を果たすことができると確信する。</p> <p>一方、明るい話題としては、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会が挙げられる。本事業は、同大会での映像、写真、印刷等の色彩表現技術の革新に寄与するとともに、同大会を契機としたイベントにも、色をテーマとしたメディアアート作品によって参画し、世界に向けて本学のブランドを発信する。</p>				
②平成30年度の実施目標及び実施計画	<p>■目標</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 「色の体験学習型教育システム」のコンテンツの拡張・充実 ② 重点研究テーマの確実な実施 ③ 国際ワークショップの開催 <p>■実施計画</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 色に関する工・芸共同研究の成果や他の研究機関による最新の研究成果をメディアアート的手段でわかりやすく楽しく伝えるコンテンツを制作し、「色の体験学習型教育システム」のコンテンツの拡張・充実をはかる。 ② 過年度と同様な方法で研究テーマの進捗管理と評価を行っていく。 ③ ロチェスター工科大学、中国文化大学、タイ王立チュラロンコン大学、東フィンランド大学等、工・芸にわたる色の研究に取り組んでいる海外の大学から研究者を招聘し、国際ワークショップを開催する。その開催案内を本学公式ホームページや関連学会のホームページに掲載するとともに、本学公式ソーシャルネットワーク(Facebook, Twitter, LINE, YouTube)、チラシ、ポスター等の手段によって幅広く社会に告知する。 <p>■目標達成の測定方法</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 平成30年度までの工・芸共同研究の成果が全てコンテンツ化され一般公開されていること。 ② 過年度と同様な方法で研究テーマの目標達成度を測定する。 ③ 少なくとも海外の大学2校が参加する国際ワークショップであること。100名以上の聴衆が集まること。 				

③平成30年度の事業
成果

①「色の体験学習型教育システム」のコンテンツを拡張・充実させ、平成29年7月にオープンさせた国内初の「色」の常設ギャラリー（愛称：カラボギャラリー）にて、以下の2回の企画展および学外での出張カラボギャラリーを3回実施した。

- ・第2回企画展「色覚を考える展」Thinking about Color Vision(4月7日～8月31日)
オープニングトークイベント：コリコ田中直樹氏
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_11.html)
- ・第3回企画展「色を探検する」Explorer of Color(9月15日～2019年4月19日)
オープニングトークイベント：東日本国際大学学長 吉村作治教授
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_14.html)
- ・出張カラボギャラリー：IGAS 2018 in 東京ビックサイト(7月26日～31日)
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_13.html)
- ・出張カラボギャラリー：ロボットフェスティバル2018 inパシフィコ横浜(9月1日)
(http://www.seit.t-kougei.ac.jp/vision/RobotFestival/make_area.html)
- ・出張カラボギャラリー：厚木CHiKaフェス(11月10日～11日)
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_17.html)

また、企画展の連携イベントとして、下記の公開講座や体験ワークショップを実施した。

- ・色をめぐるレクチャーシリーズ
「霊長類進化の視点から見るヒト色覚多様性の意味」
東京大学大学院新領域創成科学研究科・河村正二教授(6月9日)
「人間の色覚の多様性と多様性に対応した配色 ～カラーユニバーサルデザインの手法と効果～」
特定非営利活動法人カラーユニバーサルデザイン機構・伊賀 公一副理事長(6月16日)
「チョウに色はみえるか？」
総合研究院大学院大学先導科学研究科・蟻川謙太郎教授(6月23日)
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_12.html)
- ・体験ワークショップ
「光工房 カラーミキサーを作って色を楽しもう」(7月28日)
「色の3原色で作るカラフルなキューブを楽しもう」(7月28日)
(https://www.t-kougei.ac.jp/static/file/wakuwaku_2018.pdf)
「本物の紅花染めを体験してみよう！」(10月13日、11月10日)
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_15.html)

さらに、朝日新聞が主催する大型のシンポジウム企画「朝日教育会議」に参画し、ブランディング事業に関連させ、「人をつなげる・色で伝える～工学と芸術の可能性～」と題してシンポジウムを開催した。来場者数は630名で会場の有楽町朝日ホールは満席となった。
(<http://manabu.asahi.com/aef2018/tokyokougei.html>)

② 3ヶ月に1回、「色の国際科学芸術研究センター管理運営委員会」を開催し、今年度の重点研究テーマ18件の進捗状況を点検した。また年度末には、研究実績報告書(研究進捗度、論文、作品、学会発表等の記述を含む)の提出を義務付け、その内容に基づき「自己点検・評価部会」にて成果の検証を行った。また後述する国際シンポジウムにおいて、18件全ての研究テーマの発表が行われた。

③ 2019年3月15日に本学中野キャンパスで、国際シンポジウム(The 1st International Symposium for Color Science and Art 2019)を開催した。シンポジウムテーマは“The Interaction between Technology and Art on Color”である。主催は、東京工芸大学「色の国際科学芸術研究センター」で、日本印刷学会、日本画像学会、日本画像電子学会、日本色彩学会、日本写真学会、日本写真芸術学会の6つの学会の後援を得て実施した。昨年度から今年度にかけて本学の学長と理事が訪問し連携を深めてきた東フィンランド大学のJussi Parkkinen教授、中国文化大学のM. James Shyu教授、タイ・チュラロンコン大学のAran Hansuebsai教授の3名の招待講演、本学の研究成果発表(口頭発表5件、ポスター発表17件)でプログラムを構成した。発表は全て英語で行われ、参加者数は102名であった。
(https://www.color.t-kougei.ac.jp/events/events28_18.html)

④平成30年度の自己
点検・評価及び外部評
価の結果

(自己点検・評価)
学長、色の国際科学芸術研究センター長、同副センター長による自己点検・評価部会を年度末に開催した。上記の事業成果欄に記したとおり、①に関しては様々な活動やイベントを数多く実施することができたので、当初の目標を大きく上回る成果を挙げたと評価している。②の重点研究テーマ18件の成果に関しては、研究進捗度、論文、作品等の業績からA、B、Cの3段階で評価した。Aが7件、Bが10件、Cが1件であった。③の国際シンポジウムは目標に掲げた海外参加大学数、参加者数の数値目標を達成した。

(外部評価)
外部有識者として日本色彩学会会長、日本画像学会会長、コニカミノルタ科学技術振興財団、リコー、光学技研(厚木商工会議所所属企業)、研究成果を波及させようとする対象として小鮎小学校、小鮎中学校、厚木高校、厚木市役所の方々へ外部評価委員を委嘱している。第3回外部評価委員会を3月26日に開催し、平成30年度の事業実施状況報告を行い、それに対する評価を受けた。平成30年度の実施目標(上記①、②、③)に加え、④として「ブランディングの取り組み」という実施目標項目を加え、それぞれ5段階(0, 1, 2, 3, 4)で評価していただいた。その結果、①、③、④の3項目に対して外部評価委員出席者8名全員から4点(十分行っている)という評価を得た。②の項目については7名が4点(十分行っている)、1名が3点(行っていない)の評価であった。詳細は別紙の外部評価委員会議事録および評価結果を参照。

⑤平成30年度の補助金の使用状況

- ・重点研究テーマ18件への研究費
- ・カラボギャラリー：2回の企画展の設営、什器購入、作品制作費、作品賃料、ビデオ制作、グッズ作成、広報（プレスリリース、チラシ、ポスター制作・送付、ネット広告等）、オープニングトークゲスト謝金、ギャラリーアルバイト人件費等
- ・学外での出張カラボギャラリー：展示設営、運送
- ・カラボギャラリー企画展に連携した公開講座と体験ワークショップ：講師旅費・謝金、ワークショップ材料費等
- ・ブランディング事業特設ウェブサイトのサーバー維持管理、英語サイトの作成
- ・外部評価委員会：会場費、旅費・謝金
- ・国際シンポジウム(The 1st International Conference on Culture Technology)：運営費、Proceedings制作、海外招待講演者旅費・謝金、テクニカルツアー、広報（プレスリリース、チラシとポスター制作・送付、ネット広告）等
- ・東フィンランド大学、タイ・チュラロンコン大学との連携旅費
- ・研究ブランディング事業臨時事務職員人件費